

# アフリカ平和再建委員会 活動レポート

<http://www.arc-japan.org> 2019年 9月号



## ルワンダ子ども支援基金 近況報告

### ●現地パートナー団体 Five Holy Pillar's Organization

ARCは2002年以来、「ルワンダ子ども支援基金 (REF)」事業を行ってきました。これは、協力先である孤児院を通じ、子どもたちの学費、学用品、通学カバン、そして制服などをサポートするものです。そこには、1994年のジェノサイドによる戦災孤児やエイズ孤児、また貧困によって親から見捨てられた子どもたちがいました。



ジェノサイド後の新政府は、孤児たちは施設でなく、家庭に引き取って育てていくべきという方針を立て、協力先の孤児院からは徐々に子どもが家庭に引き取られていきました。嬉しかったのは、「ルワンダ子ども支援基金」で奨学支援を受け、学校に行くことができ、成長して自立した「元」孤児が、このような子どもを引き取って育てるようになったと聞いた時です (写真右上)。

この孤児院にいたスタッフでイルデフォンスさん (写真左) という人がいました。実は彼は、元は高校教師だったそうで、子ども達のこと、教育のことを深く考えている人です。2007～2010年ころは、日本の青年海外協力隊の隊員が、この孤児院で活動していましたが、みなさん、彼の人物や子どもたちへの思いに感銘を受けていました。

ARCの「ルワンダ子ども支援基金」は、日本の個人の方々のご寄付で成り立っていますが、支援先の多くの子どものためにすべてを支援できなかったこともありました。

その申し訳なさを彼に伝えると、彼は、

「いいえ。大きな湖にコップ一杯の水を注いでも見た目は何も変わらないけど、でも確実に水の量は増えているんだよ！」

そう言ってくれたことを覚えています。

イルデフォンスさんはその後、その施設が子どもたちを徐々に一般家庭に引き取ってもらうようになったため離任し、その後、ストリートチルドレンを支援する団体に勤務していましたが、ルワンダで低所得層の子どもたちのための学校を運営する学校法人 Five Holy Pillar's Organization を立ち上げました。

### ●Five Holy Pillar's Organization 訪問報告 津田塾大学 学芸学部 国際関係学科 3年 杉本優香



津田塾大学で主に国際関係学を勉強しています杉本優香です。小学校 6年生の時に、ジェノサイド生存者の手記『生かされて。』(イマキュレー・イリバギザ著、PHP 出版)という本に出会い、虐殺の悲惨さにショックを受けるとともに、主人公と同じクリスチャンとして彼女のように赦しを選び取れるだろうかと思われました。それをきっかけに、大学での卒業論文にはルワンダの和解に関することをテーマに、1年間フィールドワークをした結果を書こうと思うようになりました。今回の渡航は、その1年間の準備をすることが大きな目的でした。

7月16日に、Five Holy Pillar's Organization を設立したイルデフォンスさんとお会いし、同団体が運営する Nature Nursery School を訪問しました。

今回訪問した学校は、2015年に開始された学校の分校として、2019年1月に開校しました。現在は2歳からの未就園児クラス、幼稚園クラス、そして小学校1年生までの約60～70人がこの分校に通っています。

代表のイルデフォンスさんに設立目的をおたずねしたところ、教育に対する熱い思いをうかがうことができました。それは「貧

しい人を『教育』で助けたい」ということでした。





ルワンダで1994年に起こったジェノサイド以降、様々な理由で経済格差が広がっていることは耳にしていました。首都キガリを歩くと、「アフリカのシンガポール」と言われるような発展と富裕層の住宅街がある一方、斜面にスラムが広がっているのが目に入ります。舗装されていない道路もあり、ある日の朝には、小さな子どもたちがポリタンクを持って水汲みに行く途中の風景を目の当たりにしました。またキガリから離れて隣の郡に入ると、そこには農村が広がっていて子どもたちが農作業をしているのが見えます（私が渡航した時はちょうど学校の期末試験が終わり長期休暇に入るところでした）。

このようなルワンダでは幼稚園に通うための費用が高額であるとイルデフォンスさんは言います。しかし日頃ルワンダ語で生活をしている子どもたちが初等教育でいきなり英語で教えられても、すでに英語を学んでいる子どもたちから遅れるのは目に見えています。「貧しい家庭にも能力のある子はいる。その子たちが将来能力を発揮できるようにするには、教育が必要なのです」。そのような思いから、この学校は貧しい家庭の子どもたちには授業料の免除や給食の無料支給をしています。特に本校ではおよそ半分に当たる23名が授業料免除の対象となっています。それは本校がある地域には、貧しい家庭が多いからです。しかし、NGOとして活動する中で資金の問題に直面しました。そこで計画されたのが、今年から始まった分校でした。本校よりも平均所得の高い地域に建て、授業料を徴収し、教員、職員の人件費などに充てています。

そんな学校の児童数は開始たったの半年で増加が止まりません。

その主な要因は学校の教育の質にあります。この学校ではまず、一番下の赤ちゃんクラス(未就園児クラス)でフランス語を教えます。先生は100%フランス語で子どもたちと接したり、遊んだり、勉強したりします。それは一番のみこみが早い時期に公用語の中でも一番難しい言語を覚えさせる作戦です。そして、幼稚園の年中クラスでは英語をほんの少しだけ、年長では8割をフランス語、2割を英語、そして小学1年生ではフランス語と英語が半々になります。この教育の質が評判を呼び、さらに多くの児童が学校に来るようになると思います。



政府もこのような事業を支援しています。政府の政策として「Education for All: すべての子どもに初等教育を受けさせる」という方針が打ち出されているからです。政府から期限付きの補助金以外に、補助金の代わりにミルクが支給されることもあると言います。

実のところ、私が当初知りたかったと思っていたことは、ルワンダの和解についてや、ルワンダでの歴史教育についてでした。しかしジェノサイドがあった後の経済格差・教育格差を補うために働くイルデフォンスさんと、その仲間の先生や職員の方々の活動を見聞きする中で、将来二度と同じようなことが起こらないために、あらゆる視点を持ち、様々なバックグラウンドを持った子どもたちが同等の教育を受け、ルワンダ社会を牽引する大人になっていくことがどれほど重要なことかを思わされました。彼らの活動への思いや政府の教育方針、そして「すべての事が『和解』に基づいている」という言葉を思いめぐらしながら、次の一歩に繋げていきたいと思いました。(津田塾大学 学芸学部 国際関係学科 3年 杉本優香)

### ●ご支援いただいた方に子どもたちのメッセージカードをお送りしています

ARCの「ルワンダ子ども支援基金」は、皆様のご寄付で運営されています。一口8000円のご寄付で、サポートを受けているルワンダの子どもたちの写真付きの直筆メッセージをお送りしています。ご協力をよろしく願いいたします！

## アフリカ平和再建委員会

Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-6-1 四谷サンハイツ 511 号室 Tel./FAX: 03-3351-0892

ホームページ <http://www.arc-japan.org>



ツイッター アフリカの紛争と平和に関するイベントや情報の発信をしています！

@ArcJapanNews どんどんフォローしてください！



フェイスブック 日頃のARCの様子やプロジェクトの近況、アフリカ関連のイベントや情報の発信をしています！

[ARC ページ] <https://www.facebook.com/ARCJAPAN/> “いいね”、“シェア”をお願いいたします。